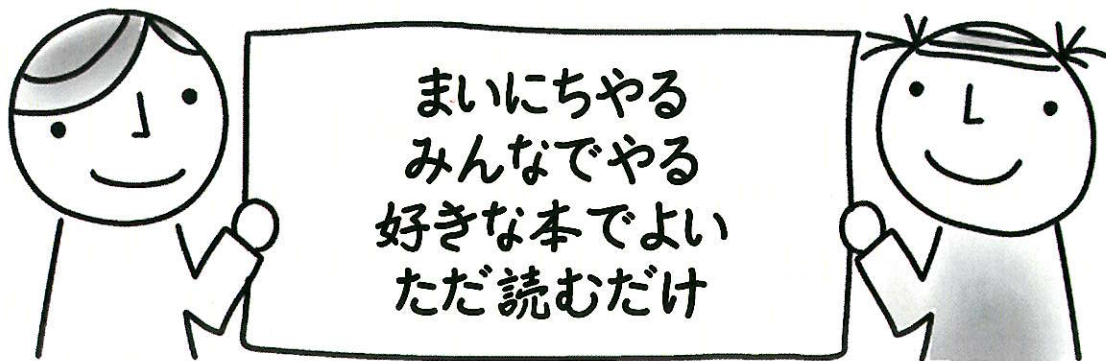


光陽中図書館ニュース

2025 年度 第 1 号 4.10
図書館担当：西海ひなた
学校司書：浅村麻姫子

4/10(木)朝読書スタート！



基本は、「8:30からの5分間、全員で、自分の好きな本を、静かに読む」です。
「たかが5分間、されど5分間」、積み重ねがきっと大きな力になります。

1日5分→1週間で25分→1年間(約200日)で1000分÷約16時間 →3年間で約50時間！

- ・楽しみながら、幅広い読書に挑戦しよう。
- ・読書を通じて、ものの見方や考え方を広げよう
- ・内容を読み取る力、情報を活用する力を育てよう。
- ・落ち着いた雰囲気朝の学活をむかえよう。

★各自で本を用意しましょう(光陽中図書館の本や学級文庫も活用しましょう)。

★8:30からすぐに読書を始められるように、机の上に本を出して席についていましょう。

★この時間は読書だけに集中するための
5分間です！

私語・居眠り厳禁、予習や宿題などをする時間
でもありません。

★読む本は自分の好きな本で結構。

ただし、マンガ、雑誌、教科書、資料集等は除きます。

⇒ 学校図書館の本はもちろん、公共図書館(新琴似図書館など)も活用してください。

★テスト前や行事前には、朝読書以外の指示が出ることもあります。

庭に咲く花の名を、図鑑で知った。
今、地球が抱える問題を、新聞で知った。
歴史に隠された感動を、伝記で知った。
胸を焦がすような切なさを、小説で知った。
本や新聞は、僕に、新しい世界を見せてくれる。
読むたびに、知識が積み重なって層になる。
知識の層と書いて、「知層」。
読めば、あなたの知層になる。
今日はどんな世界が待っているんだろう？

光陽中図書館 開館予定 4月18日(金)



夢がかなったその先に

しょうせつか みやじま みな
小説家 宮島未奈さん

わたしのデビュー作『成瀬は天下を取りにいく』を読んだ人から、「成瀬あかりのモデルは宮島さんですか」とよく聞かれます。

わたしはいつも、「似ているところもあれば、似ていないところもあります」と答えます。たとえば人前に出ても緊張しないところとか、白いご飯が好きなのは似ています。でも、成瀬と違って他人から自分がどう見られているか、常に気にしています。200歳まで生きると豪語する成瀬ですが、わたしはそこまで長生きしたいと思いません。

10代の頃のわたしは、毎日が嫌で嫌で仕方ありませんでした。学校でも家でも傷付けられることばかりで、今でも思い出すと気持ちが沈みます。

つらかった10代のわたしが勉強のほかに打ち込んでいたのはテレビゲームです。ダービースタリオン(ダビスタ)という、競走馬を育てて走らせるゲームでした。ダビスタをしている間はつらいことを思い出さずに済み、時間をつぶすにはちょうどよかったのです。

まだインターネットが普及していなかったので、テレビもよく見ていました。この頃から大好きなのが、爆笑問題の太田光さんです。漫才が抜群に面白く、生放送では思いっきりふざけて、たくさん笑わせてくれました。

太田さんが自叙伝『カラス』を出版したのはわたしが高校一年生のときでした。爆笑問題の本も大好きで読んでいたので、『カラス』もすぐに読みました。

太田さんは高校時代、友達が一人もいなかったそうです。机に卒業までの日

数分の線を鉛筆で書いて、毎日一本ずつ消していたといいます。

わたしも太田さんの真似をして、机のすみに鉛筆で線を書いて日々消していました。太田さんが学校が嫌でも毎日通ったと書いてあったので、わたしも毎日通いました。

結果、わたしは三年間欠席なしの皆勤賞でした。皆勤賞の記念にもらった目覚まし時計は今でも家にあります。

それから20年以上が経ち、わたしは作家になりました。『成瀬は天下を取りにいく』が本屋大賞にノミネートされて結果を待っていた頃、驚くべきことが起きました。なんと、太田さんがラジオで『成瀬は天下を取りにいく』について話していたのです。

太田さんは「すごく面白かった」「本屋大賞は間違いない」とおっしゃっていました。わたしはずっと太田さんの舞台を見上げるだけだったのに、太田さんがわたしの舞台を見てくれた。片思いが実って両想いになったような気持ちでした。

その一方で、ちょっとだけ納得できるところもありました。だって、わたしは太田光さんが大好きで、つらかった10代を乗り越えて、大人になったのです。太田さんがわたしに生きる力を与えてくれたのだから、わたしが書くものは太田さんの感性に合うところがあるのだと思います。

読んでくださっただけでも十分なのに、Webメディアの企画で太田光さんと対談する機会が巡ってきました。

普段から緊張しないわたしですが、太田さんとソファに座って写真を撮られるときにはさすがにドキドキしました。

太田さんは想像していた以上にすてきな方でした。わたしの話を温かく受け止め、質問にも丁寧に答えてくださいました。生きていてよかった、この人を好きでいてよかったと心から思いました。

中でも印象的だったのは、高校時代の話です。わたしが太田さんの『カラス』を心の拠りどころにして耐えていたという話になり、

「だけど、『あのつらい時代があったからこそ今がある』って美談にしちゃいけないと思うんです」

と自分の考えを伝えたら、太田さんは「そうだね」と同意してくださいました。あんなにつらい時期はないほうがよかったし、できることならもっと楽しい青春を過ごしたかった。そんな話をして、過去のわたしが少し救われた気がしました。

対談の時間は夢のように過ぎました。今でもときどき写真を見返して「ああ、現実だったんだ」と確認しています。

作家になりたいと思う気持ちは小学生の頃からありました。だけど本当に作家になれるとはあまり思っておらず、コンテストに応募することはありませんでした。25歳ぐらいで「作家になれるのは一握りの人間だから」と、小説を書くのをやめてしまいます。

その一因となった本が、三浦しをんさんの『風が強く吹いている』でした。箱根駅伝を目指す大学生の話で、長いのにまったく飽きることなく読めます。わたしは一生かかってもこんな素晴らしい小説は書けないと思いました。

それが34歳になり、やっぱりもう一度書いてみようという気になりました。森見登美彦さんの『夜行』を読んで、その不思議な世界に魅了されたのが理由のひとつです。久しぶりに書き上げた小説を応募したら最終候補に残り、「もしかしたら見込みがあるのかもしれない」と思うようになります。

小説を熱心に読むようになったのはこの頃からです。作家になるならいろいろな小説を知っておいたほうがいだろうと、図書館でたくさん借りて読みました。

本は書店で買うのが一番ですが、図書館もどんどん利用したほうが良いと思っています。買うのを迷って読まないより、借りて読んだほうがずっといいからです。

このとき参考に使っていたのが、文学賞の受賞リストです。わたしが応募して

いた新潮社の「女による女のための R-18文学賞」の過去の受賞作は、手に入る限りすべて読みました。ほかの文学賞の受賞作も順番に読み、気に入った作家さんの作品は片っ端から読みました。それを参考にしようとしたわけではなく、ただ楽しく読んでいただけです。

3年間の投稿生活を経て「ありがとう西武大津店」が R-18文学賞の大賞・読者賞・友近賞を受賞し、2023年には『成瀬は天下を取りにいく』で作家デビューできました。

今も小説はよく読めます。編集者と話していて、話題にのぼった本は必ず読むようにしています。ときどき編集者のほうから「こんな本が出ました」と新刊を送ってくれることがあって、それもありがたく読めます。

自分で選ぶとどうしても偏りが生じますが、他人から提案してもらうと普段は読まないような本が読めます。作家になってよかったことのひとつです。

わたしは作家になる夢を39歳でかなえました。大人になってからでも夢はかなうのだと実感しています。10代の皆さんはまだまだ人生長いです。どんなときでも希望を持って生きてほしいと思います。

『成瀬は天下を取りにいく』を読んだ大人からは、「10代の頃に成瀬と出会ったかった」とよく言われます。皆さんは10代のうちに成瀬と出会う大チャンスです。

わたしが太田光さんとお会いできたように、皆さんもわたしとどこかで巡りあうかもしれません。そのときにはぜひ「成瀬読みました!」と話しかけてください。

宮島未奈(みやじま・みな) / 1983年静岡県富士市生まれ。滋賀県大津市在住。京都大学文学部卒。2021年「ありがとう西武大津店」で第20回「女による女のための R-18文学賞」大賞、読者賞、友近賞をトリプル受賞。2023年同作を含む『成瀬は天下を取りにいく』でデビュー。第11回「静岡書店大賞」小説部門大賞、第39回「坪田譲治文学賞」、第21回「本屋大賞」など18冠を獲得し話題となる。続編『成瀬は信じた道をいく』とあわせてシリーズ累計100万部を突破。

*掲載に当たり、『YA 朝のブックガイド(2025 年版)』発行者の YA 出版会を通じて宮島未奈様より許諾をいただいています。